

中部ヨーロッパ・北欧における日本研究の動向

—社会科学的なアプローチを中心として—

Josef KREINER (ドイツ日本研究所)

1. 総論

この報告では、1980年代の半ば以降の中部ヨーロッパのドイツ語圏（ドイツ連邦共和国、オーストリア、そしてスイスの一部）を中心として、オランダ、そしてフィンランドを除くスカンジナビア諸国（デンマーク、ノルウェー、スウェーデン）における、アイヌと沖縄をはじめとする少数民族・文化を含む日本の社会と文化を研究対象とする文化・社会人類学、社会学、経済学、そして政治学をも含む最も広い意味においての社会科学の分野における研究の現状と動向を扱うものとする。なお、それより以前の同地域における日本研究の発展などについては、いくつかのまとまった研究報告があるので、それを参照していただきたい（Kracht 1990; van Bremen 1990; Linhart 1993; Befu and Kreiner 1992）。最近は特にオーストリアとドイツでよくまとまった文献目録がいくつも出版されたので、ドイツ語圏内における日本研究の動向について把握することが容易になった（Formanek and Getreuer 1989; Getreuer 1991; Hadamitzky and Kocks 1990/93; Ölschleger and Stalpl 1990）。また、ヴィーン、ボン、マールブルク、ハンプルク、トリアーなどの大学の日本学科では、毎年簡単な年次報告を出しているが、それには各大学で行なわれている日本関係の講義録やそれぞれの大学に提出された修士論文と博士論文のリストは未だに公表されていないので、ここでは大勢の関係各位からお送りいただいた資料に基づいて報告することにした。貴重な資料を提供して下さった方々に感謝の意を表すとともに、まとめ方に行き届かない点があるとすれば、ご寛恕を乞う次第である。

中部、北部ヨーロッパにおける社会科学的なアプローチをとる日本研究は、この10年間で確かに大きな発展を遂げたが、そもそもの出発点が比較的低い水準からであったために、他の、例えば文学などの分野における日本研究と比較してみた場合に、あるいは北米における日本に関する社会科学的な研究と比較した場合、未だに若干の遅れをとっているような印象は否めない。特にドイツでは、伝統的に文学を中心とする文献学的な日本学が支配的であり、現時点においてもそれが根強く残っていること、また最近是一般社会や政財界からの、さらにそれに加えて学生からの現代日本に対する研究への要望が大きくなってきていることなどから、それに答えるための社会科学的なアプローチからする日本研究は、必要な受け皿としてますます重要となってきている。ただ、そうした要望が外的諸事情に依るところ大きいために、内部の研究体制がそれになかなか即応し難いというのが現状である。

文献学的な日本研究との間の議論、言い換えると日本研究の本質と目的にまつわる議論については、最近出版されたリンハルト（Linhart 1993）、そして雑誌「Japanstudien」1994年第1号と、

ベフ、クライナー (Befu and Kreiner 1992) の学界動向に関する紹介を参照されたい。

2. 研究体制

先に触れたこの10年間の間に行なわれた飛躍的な発展は、主に社会科学的な分野における日本研究のために新しく設置された様々な研究体制への著しい評価のうちにうかがうことができる。主に社会科学の分野における日本研究のために、この10年間に多くの研究機関や施設（国公立の研究機関、大学、博物館、そして新しく組織された研究団体）が新設された。

2. 1. 研究機関

まず、北欧はスカンジナビア諸国の協同運営で、以前より活発な研究活動を続けているだけでなく、日本研究よりもっと広い範囲のアジア全体に及ぶ研究を行なっているコペンハーゲンの Nordic Institute of Asian Studies（北欧アジア研究所）、また、ストックホルム大学の経済学部には、新たに日本の社会と経済に関する総合的な研究を委託された The European Institute of Japanese Studies（ヨーロッパ日本研究所）が設立された。オランダで最近新しく設立されたのは、ライデンの International Institute for Asian Studies（国際アジア研究所）とアムステルダムの Centre for Asian Studies（アジア研究センター）であるが、ここでは学際的な日本研究が目指されている。ヴィーンでは10年ほど前にオーストリア学士院に Institut für Geistesgeschichte Asiens（アジア思想史研究所）が設立されて、そこではヴィーン大学の Sepp Linhart 教授の指導の下で現代日本の社会問題に関するいくつかのプロジェクトが行なわれている。そして、ドイツでは以前よりハンブルクの Institut für Asienkunde（アジア研究所〈第三セクター〉）とミュンヘンの ifo Institut für Wirtschaftsforschung（経済研究所）が、日本の政治と経済に関する研究を進めている。なお、東京には1993年に創立120周年を迎えた Deutsche Gesellschaft für Natur-und Völkerkunde Ostasiens（OAG、ドイツ東洋文化研究協会）が、現代日本の諸問題を含めた幅広い日本紹介を行なっている。その出版活動の中から、ここでは Rothacher 1992 を挙げておく。そして、それに比べるとまだ歴史は浅いが、1987年に設立されたベルリンの Japanisch-Deutsches Zentrum Berlin（ベルリン日独センター、ベルリン州政府と日本の外務省の協同出資によって運営）が主に学会等の場を提供しているのに対して、ドイツ連邦共和国政府教育科学研究技術省の海外学術研究機関の一つとして、1988年東京に設立された Philipp-Franz-von-Siebold-Stiftung, Deutsches Institut für Japanstudien（ドイツー日本研究所）は、近現代の日本に関する広汎で総合的かつ学際的な研究活動を行なっている。

2. 2. 大学の研究施設

さて、各国の大学に設置された研究施設は、まずオランダでは日本に関する研究の一切を、国立ライデン大学の Centrum voor Japanologie en Koreanistik（日本・韓国研究センター）に集中させて、Kurt Werner Radtke 教授（思想史、国際政治、外交政策）と Jan van Bremen 教授（文化人類学）が社会科学の分野に関する日本研究の講座を担当している。なお、同大学には1985年に新しく日本の物質文化（工芸美術を含む）についての講座が開設されて、Willem van Gulick 教授が担当するようになった。スカンジナビア諸国では、コペンハーゲン大学の Kirsten Refsing 教授（民族学）、Arne Kalland 教授（社会人類学）と、Olof G. Lidin 教授（思想史研究）、ノルウェーではオスロ大学の Arne Røkkum 教授（民族学）の名を挙げることができる。そして、

スウェーデンのストックホルム大学の東洋研究部が最近取り上げている一連の研究活動は大いに期待できると思う。

ドイツ語圏に話を移すと、ウィーン大学 (Alexander Slawik, Sepp Linhart) では昔から民族学と文化人類学的・社会学的な研究傾向が強く、そこから社会科学的なアプローチをとった日本研究は、ボン、マールブルク、そしてデュイスブルクの各大学などに広がり、今ではトリアー、エルランゲン、ケルン、そしてイエナの各大学などでも現代日本を対象とした社会科学的な研究が重視されるようになってきた。政治学の分野における日本研究は、ハレ大学の Gesine Foltjant-Jost 教授と、ハイデルベルク大学の Wolfgang Seifert 教授、経済学ではマールブルク大学の Erich Pauer 教授、ベルリン自由大学の Sung-Jo Park 教授、ボーフム大学の Wolfgang Klenner 教授、そしてデュイスブルク大学の Werner Pascha 教授が既にまとまったカリキュラムを提供している。

現在のドイツでは20か所の大学に日本研究の講座が置かれていて、40人の教授のポストが用意されている（因みにそれは多くの場合にたった一人の教授が日本研究の全分野を担当することを意味している）が、今のところその内の10人のポストが空席であるし、又教授のポストに採用される資格を持つ若手研究者も見当たらないので、これはドイツにおける日本研究の将来の発展のために大変深刻な事態であるといってよい。また、この40人の教授ポストの内、約15のポストは経済学を含む社会科学の分野を専門とする教授のためのものであるもので、その意味でも今後この分野はもっと増やす必要があるのではないかと考えている。

ここでドイツにおける新しい傾向として次の3点を述べる必要がある。それはまず第一に、現在多くの大学には一人ないし少数の教授が担当している日本研究機関がそれぞれ所属学部に分散して設置されているが、各大学（例えば、マールブルク大学、デュイスブルク大学、ミュンヘン大学）がそれらを大学内部で統合した日本研究機関 (Japanzentrum) に新しく再編する動きがあることである。そして第二に、これまで専任教授が一人しかいなかった研究機関（例えば、ハンブルク大学、ベルリン自由大学、ボン大学など）に教授ポストを増やすことによって、授業や研究の幅をこれまで以上に拡張する努力を行なっていることである。第三は日本研究を専門とする機関以外でも、一般の学生を対象として現代日本についての講義やまとまったカリキュラムを提供する動きがあることである。例を挙げると、コンスタンツ大学の社会学部では現代日本の社会と文化という講座が置かれ、そして私立ヴィッテン・ヘルデッケ大学とコブレンツ経営学大学でもそれぞれ日本に関する講座を設けている。

2. 3. 博物館

次に博物館の存在はこの分野にとってやはり大きな意味を持っていると思われる。特に、世界で最も古い歴史を誇るライデンのオランダ国立民族学博物館の東洋部では、日本部門の担当学芸員である Matthias Forrer 氏と Ken Vos 氏が、現在オランダ政府の実施している、いわゆるデルタ・プログラム（オランダに残されている文化遺産を保存するために、オランダ全国で行なわれている調査研究プロジェクト）の一環として、同館に保管されている日本関係コレクションに関する調査を担当している。また、このデルタ・プログラムとはスケールは違うが、オスロ大学附属民族学博物館でも同じような企画、すなわち同館の全てのコレクションを新しく整理し直す作業が、最近 Arne Røkkum 館長の指導の下で完結した。

バーゼル市立民族学博物館では、1993年に Gerhard Baer 館長の指導の下で開催された現代日本の生活文化を紹介する特別展が注目を集めた (Baerlocher and Bircher 1993)。また、ケルン市立民族学博物館では1987年に同館の収蔵品を中心としたアイヌ民族文化の特別展 (Kreiner and Ölschleger 1987) を開催したが、その成功によって同展は1989年ブリュッセルの「ユーロパリア '89」にも、特別展として出品された (Kreiner and Ölschleger 1989a, 1989b)。

それに比べて、ハンブルク市立民族学博物館、ミュンヘンのバイエルン国立民族学博物館、そしてウィーンのオーストリア国立民族学博物館では、長期にわたって担当学芸員の席が空席であったり、また博物館の改築などに伴う様々な不利な条件によって、最近の研究活動は下火になっている。ライプツィヒ市立民族学博物館のコレクションの保存状態はあまり良くないが、そのことがかえて同館のこれからの研究活動に期待を寄せることにもなろうかと考えている。

博物館の収蔵作品を対象とする調査研究では、ボン大学が1983年から86年にかけて、旧ソ連を除く全ヨーロッパに及ぶ博物館・美術館などに所蔵されている琉球とアイヌ文化に関するコレクションについて、筆者の指導の下で総合的な実地調査を行なったが、この調査はドイツ連邦共和国政府の科学研究費とトヨタ財団の助成によって漸く実現することができた。そして、この調査で得られたデータを基礎として、沖縄県の浦添市美術館 (1992年) と東京国立博物館 (1993年) でそれぞれの里帰り展が開催された (図録はドイツー日本研究所1992、及び東京国立博物館1993)。この調査の総合研究の最終的な報告書が未だに出版されていないのは残念なことであるが、各博物館が所蔵しているアイヌ関係のコレクションについては公表されている (Kreiner 1993)。

2. 4. 学会の組織化

次に、全ヨーロッパ規模の国際的な学会の組織、例えば EAJJS (European Association for Japanese Studies、ヨーロッパ日本研究協会)、EAJRS (European Association of Japanese Resource Specialists、日本資料専門家欧州協会)、JAWS (Japan Anthropology Workshop、日本の人類学研究会)、あるいは EU の枠内でのエラスムス・プログラム (The Leiden Group of Japanese Studies) を別にして考えると、最近特に中部ヨーロッパでは、社会科学的な日本研究の分野における研究者の組織化が進められてきた。そして、それによって学際的、国際的な研究協力の可能性も生まれてきた。それについてまず第一に触れなければならないのは、1990年に組織された Gesellschaft für Japanforschung (ドイツ語圏日本研究学会) である。この組織は1972年来およそ一年半ごとに定期的に開催されてきたドイツ、スイス、オーストリアなどの日本研究者を中心とする国際会議 (Deutscher Japanologentag) の事務局を担当するようになり、さらに学会誌「Japanforschungen. Mitteilungen der Gesellschaft für Japanforschung」を連絡紙として発行している。この学会における社会科学的な研究活動の影響力は、文献学、文学的な従来からの伝統的な日本研究と並んで、これから次第にその比重を増してくるとみてよいだろう。また、その中で最近発足した日本の宗教を取り上げる研究会 Arbeitskreis Religion の中心となっているのは、トリアー大学の Klaus Antoni 教授であり、将来的には各分野の研究会が活発に行なわれるようになることを期待している。

また、社会科学的な日本研究を中心とする研究者は二つの違った学会を設立した。すなわち、一つはドイツの若手研究者で構成されていて、日本語の文献研究と日本での実地調査に重点を置いた研究活動を行なっている Vereinigung für Sozialwissenschaftliche Japanforschung (事務局

は回り持ちで現在ミュンスター大学が担当し、不定期に連絡紙 Newsletter を発行)で、このグループは、毎年12月に一つのテーマを決めた年次大会を開催して、その報告書を出版することも試みている。その一つの例として Vereinigung für Sozialwissenschaftliche Japanforschung 1992 を挙げておく。また、それとは対照的に、Deutsch-Japanische Gesellschaft für Sozialwissenschaften (日独社会科学学会、中心になっているのはザールブリュッケン大学の Hans-Joachim Kornadt 教授とコンスタンツ大学の Gisela Trommsdorff 教授；不定期に連絡紙 Rundbrief を発行)は、日本語の文献は読めないけれども、日本の社会などについて研究しているドイツの研究者、及びドイツとの関係が深い日本の研究者が不定期に集まって、一つの学会を構成している。なお、1994年には大阪でその第3回大会を行なったが、その第1回大会の報告書は最近出版された (Kornadt and Trommsdorff 1993)。

Deutsch-Japanischer Wirtschaftskreis (日独経済学・社会科学シンポジウム)は、東京大学の有沢広巳教授が中心となって、ドイツと日本の経済学者によって1966年に初めて開催されたが、その後大河内一男東京大学教授を経て現在の責任者は日本側は松田智雄東京大学名誉教授、ドイツ側は Wolfgang Klenner 教授になっており、10回目の会合は1993年にボーフムで開催された。報告書としては Hacks et al. 1990 などがある。また、同じように Deutsch-Japanischer Geographenverband (日独地理学者会議)は、ボン大学の Gerhard Aymans 名誉教授、デュイスブルク大学の Winfried Flüchter 教授、そして明治大学の石井素介名誉教授と関西学院大学の浮田典良教授が中心となって、不定期ながら国際会議を開催して出版活動を行なっている。報告書としては Flüchter 1994 を例として取り上げておく。

3. 研究プロジェクト

このような研究体制を基礎としたいいくつかの長期的でしかも学際的な、あるいは国際的な研究プロジェクトが最近注目を集めている。ここではその例として、カッセル大学で教育学を担当している Ulrich Teichler 教授が中心となって、フォルクスワーゲン財団から助成金を得て日本の教育及び雇用制度を比較研究しているプロジェクト「教育制度と雇用システムの相互関係—日独比較研究—」を紹介しておこう。このプロジェクトは全体としてさらに3つの具体的なプロジェクトに分けられるが、それぞれは Teichler 教授、ハーゲン放送大学の Walter Georg 教授、そしてボン大学の社会科学科主任教授の Friedrich Fürstenberg 氏が担当している。その中間報告として、1993年に東京のドイツ—日本研究所で国際シンポジウム「日本における教育とキャリア」が開催されたが、その報告書は近い内に出版する予定である (Demes and Georg, 1994)。また、ベルリン自由大学の Irmela Hijiya-Kirschnereit 教授によって進められている、Sunrise Lexikon のプロジェクト (担当は Wolfgang Hadamitzky) も重要である。これは初めてコンピューターを中心とした最新のデータを含めた日本事典を目指しているが、その実質的な実現は遅れがちで、収録されている項目を見ると、やはり文学などの伝統的な日本研究の項目の方がより進んでいるという印象を受ける。それは恐らく、社会科学の分野における日本研究者が、教育者としての立場や大学や所属機関での役職による多忙な職務に追われて手が回らなくなっているためではないかと思われる。次に、ヴィーン大学の日本研究所と先に触れたオーストリア学士院のアジア思想史研究所は、長年にわたって日本社会の高齢化を取り上げてきたが、これはヴィーン大学

の Sepp Linhart 教授によって実施された研究で、既に優れた研究成果を発表している (Linhart and Wöss 1984; Maderdonner 1987)。なお、最近では研究対象をむしろ日本の文化における「遊び」の役割と意味を中心とした、レジャー社会の研究にシフトし、このテーマによって1995年春にヴィーンで国際会議を開催する予定とのことである。ボン大学は日独交流史、あるいは中国・四国地方を中心とした日本の地方史の研究を進める計画を立てており、文献収集は既に終えて、具体的な研究に取り組み始めた。そして、先にも触れたように、同大学で実施されたヨーロッパの博物館・美術館に収集されている日本関係コレクション (アイヌと沖縄のコレクションを中心として) の調査は、まだ整理を継続しているところである。なお、ドイツー日本研究所では、開設当初から約4年間にわたって共同研究プロジェクトとして「戦後日本の価値観の変化」に取り組み (Aspects of value change in Germany and Japan, 1993)、特に個人主義と性的平等の問題を中心とした世論調査も実施した。この報告書は近い内に発行する予定である (Ölschleger et al., 1994)。今後は取り組むテーマを幾分変更して、戦後日本の家族の変化と日本における経済政策との二つのテーマを中心に展開させていく予定である。

4. 分野別の研究動向

さて、ここで見方を変えて、それぞれの分野ごとにここ10年間に行なわれた主だった研究活動に焦点を合わせてみたい。

4. 1. ヨーロッパにおける日本像

ヨーロッパにおける日本像とこれによって形成された、ヨーロッパないし各国の日本研究の動向を取り上げる研究は非常に活発であるが、特に注目すべきものは、Peter Kapitza が編集して出版した、16世紀から19世紀半ばに至るまでのヨーロッパ思想史における日本像に関する文献 (Kapitza 1990) である。そして、筆者 (Kreiner 1990) と、ベフ、クライナー (Befu and Kreiner 1992) はヨーロッパの思想史を通じて、変化してきた日本像を追いながら、各国の日本研究の起点となっているものを立ち入って検討している。なお、比較文学の研究者としての立場から、ヨーロッパにおける日本像と日本研究の盲点を分析した Irmela Hijiya-Kirschner の著作 (Hijiya-Kirschner 1988) は、注目すべきものである。そして、この研究分野に対しては1993年に開催された二つの展覧会、すなわち、バーゼル市立民族学博物館で開催された “Japan: Selbstbild-Fremdbild” 「日本の自画像と外から見た日本」 (Baerlocher and Bircher 1993) と、国際交流基金の多大な助成で実現したベルリンにおける特別展 “Japan und Europa, 1543-1929” 「日本とヨーロッパとの文化交流」 (Croissant et al. 1993) が多大の影響を及ぼした。

4. 2. 地理学

地理学の分野では、最近特にデュイスブルク大学の Winfried Flüchter 教授が中心になって研究活動を行なっている。彼が所属している同大学の研究所では日本の地域開発、一極集中と地価の諸問題、そしてテクノポリス計画など多くの研究が進められている。なお、テクノポリスの問題については、マールブルク大学の Erich Pauer 教授とコペンハーゲン大学の大学院生 Sam Kühnau Steffensens 氏も研究に取り組んでいる。地理学の分野で最近注目を集めたのは、ボン大学に博士論文として提出された、ドイツー日本研究所の研究員 Ralph Lützelers の人口地理学的な研究であるが (Lützelers 1993)、このテーマは今後ドイツー日本研究所においてさらに展開

されることが期待されている。

4. 3. 社会学

社会学の分野では、残念なことに研究のアンバランスが特に強く感じられる。その中には、中部大学の Ulrich Möhwald 助教授が取り組んでいる家族社会学や日本家族史の研究と、ボン大学の Kornelia Erlen 女史が同大学に提出した家制度についてまとめた卒業論文 (Erlen 1993) もあるが、この分野はドイツ、そしてヨーロッパではあまり研究が進んでいないと言える。一方、労働・産業社会学の分野では近年新しい研究が次々に発表された。まず、ヴィーン大学に博士論文を提出した Wolfgang Herbert 氏の研究 (Herbert 1992, 1993)、そしてドイツー日本研究所の元研究員 Bettina Post-Kobayashi 女史と Helmut Demes 氏の研究があるし、ハイデルベルク大学の Wolfgang Seifert 教授は労働運動を、そしてボン大学の Friedrich Fürstenberg 教授はやはり労働者問題を取り上げている等、この分野では幾分蓄積された研究が見受けられる。そして、教育、あるいは青年社会学の分野では、カッセル大学の Ulrich Teichler 教授、コンスタンツ大学の Gisela Trommsdorff 教授、そしてザールブリュッケン大学の Hans-Joachim Kornadt 教授等の最近の研究がある。女性史、またジェンダ研究の分野では、デュッセルドルフ大学の Michiko Mae 教授と、ボーフム大学の Ilse Lenz 教授が最近新しくその講座を設けたことで注目されている。そのほかにもハイデルベルク大学の Wolfgang Seifert 教授は女性運動の歴史を、そして、ストックホルム大学では Tatiana Dahlgren 女史が文学研究から女性史研究に近づいている。これはドイツー日本研究所の Hilaria Gössmann 研究員と、Lisette Gebhardt 研究員の両氏にも共通する傾向である。なお、日本人移民の問題、特に南米ボリビアを中心とする日本移民の社会を研究対象として取り上げているのは、ドイツー日本研究所の研究員 Hans Dieter Ölschleger (Ölschleger and König 1994; Ölschleger and König, 1995) のみである。

4. 4. 政治学

政治学の研究ではいくつかのまとまった著作があり、例えばハンプルクのアジア研究所は毎年日本の政治・経済についての概要を出版し (Pohl 1992)、ボンのドイツ外交政策研究会からも非常にまとまったものが刊行された (Maull and Fuhr 1993)。個人で言えば、ミュンスター大学の Paul Kevenhörster 教授 (Kevenhörster 1990) と、ライデン大学の Kurt Werner Radtke 教授 (Radtke 1990)、ハレの Gesine Foljanty-Jost 教授、ハイデルベルクの Wolfgang Seifert 教授等をはじめとする研究者の活躍もあるので、この分野は一応十分に業績を上げることができたといってよい。

4. 5. 経済学

経済学は他の分野と比べると比較的まとまった研究が多いが、特に目立つのは、最近総合的によくまとまった入門書が出版されたことである (Pascha 1994; Demes et al. 1994)。しかも、新しいテーマが次々に取り上げられている。例を挙げると、最近注目されているのは、日本の企業が海外で、特にヨーロッパで行なっている投資活動、ジョイント・ベンチャーなどの問題、そしてそれに伴う、例えばいわゆる日本的経営の応用と文化摩擦、社会摩擦などの諸問題は、特にストックホルム大学のヨーロッパ日本研究所の中心テーマの一つになっていると見受けられる。また、ベルリン、デュイスブルク、そしてボーフムの各大学でもこのような研究は進められているし、最近ドイツー日本研究所でこのテーマに関する報告書がまとめられた (Tokunaga,

Altmann and Demes 1992; Nakamura, Demes and Nagano 1994; Waldenberger 1994)。また、同研究所の研究員 Martin Hemmert はケルン大学に提出した博士論文で、日本経済の二重構造と系列などの問題を取り上げた (Hemmert 1993)。そして、流通制度については、最近ユニークな研究としてマールブルク大学に提出された Hendrik Meyer-Ohle 氏の博士論文がある。

4. 6. 宗教の研究

宗教の研究では、仏教や道教よりも神道に関する研究が注目を集めているように思われる。この分野についてのまとまった紹介としては、ミュンヘン大学の Carl Steenstrup 教授 (Steenstrup 1982) がデンマークで出版したものがあるが、最近の研究ではトリアー大学の Klaus Antoni 教授が宗教学の立場から天皇制の研究に取り組んでいる (Antoni 1991)。北欧では、コペンハーゲン大学の Arne Kalland 教授が神道の儀礼と祭礼、また民間医療法と宗教について、そしてオスロ大学の Arne Røkkum 教授はシャーマニズムを研究している。

思想史全体については、ミュンヘン大学の Carl Steenstrup 教授が1980年に出版した著作は、近い内にその英語版が刊行される予定である。コペンハーゲン大学の Olof Lidin 教授の儒教研究、そしてライデン大学の Jan van Bremen 教授と京都大学の米山俊直両教授による安岡正篤についての協同プロジェクトもここで指摘しておかなければならない。最後に Christian Oberländer 氏が1994年にボン大学に提出した博士論文のテーマである「明治中期における漢方医学の動き」も、この思想史の分野に入れてよいのではないかと考える。

4. 7. 民俗学・民族学

民俗学と民族学の分野では、最近新しい研究がほとんど見当たらない。ただ一人、Arne Kalland 氏による和歌山県新宮を中心とする村落研究がある (Kalland 1981; Kalland, in print)。また、この研究を基礎として九州北部で行なった実地調査を踏まえて、同氏は近年日本の捕鯨に関する一連の論文も発表している (cf. Kalland and Moeran 1992)。

4. 8. 日本の少数民族・文化

日本の少数民族・文化については、アイヌの研究が近年著しく盛んになったのではないと思われる。これは、特に1980年代に入ってもなく Norbert Adami (1980; 1991) による文献目録が出版され、また、ボン大学の既に何度も触れているヨーロッパの博物館などにおけるアイヌ関係コレクションを整理するプロジェクトが進められることによって、ケルン市立民族学博物館、ブリュッセルの「ユーロパリア '89」、そして1995年はじめに開催される大英博物館民族学部門 (Museum of Mankind) でのアイヌ特別展に続いて、いくつかの著作が相次いで出版されたからである (Ölschleger 1989; ヴィーン大学名誉教授 Slawik 1992; そしてストックホルム大学の Katarina Sjöberg 女史は最近の日本におけるエスニシティの問題を取り上げた、Sjöberg 1993)。言語学的研究では、Kirsten Refsing (1986) と Hans Adalbert Dettmer (1989) 両氏によるアイヌ語の研究書が著されている。また、ボン大学は1987年に国際シンポジウム「ヨーロッパにおけるアイヌ文化研究」を開催したが、その報告書は1993年にドイツ・日本研究所から出版された (Kreiner 1993) ので、これが将来のアイヌ研究にとって一つの基礎となることを願っている。

さて、アイヌ研究に比べるとヨーロッパにおける沖縄研究は未だに非常に数が少ない。これまでに何度も触れてきたボン大学で実施した博物館のコレクションについてのプロジェクトがある

が、それによってベルリン、ケルン、ヴィーンなどの博物館に所蔵されているコレクションが注目されるようになり、1992年には浦添市美術館において里帰り展を実現することができた。また、1994年10月初旬にボン大学で開催された EAJRS の第 5 回大会をきっかけにして、ドイツー日本研究所が主催した「ヨーロッパにおける琉球の歴史と文化に関する資料」シンポジウムもこの分野の今後の研究に刺激を与えることになろう (Kreiner, in print)。

5. 総括

最後に、こうした研究動向を総括すると、経済学の分野における研究は著しい発展を見せており、しかもその研究が比較的高い水準に既に達しているのに対して、社会学的なアプローチをとっている研究は、進んでいる分野もちろんあるが、例えば民族学などのように、むしろ後退した分野のあることも注目しなければならない。そして、労働・産業社会学は今後ますます盛んになると思われるが、それと比べると家族社会学はどちらかといえば遅れているような印象を受ける。さて、筆者が一番遺憾に思っているのは、現代日本の日常生活・生活文化に関する調査研究が先ず無いといってよい点である。この分野では Arne Kalland (1986) 氏の研究とバーゼル市立民族学博物館が開催した展覧会 (Baerlocher and Bircher 1993) がその主なものであるが、今後この分野でのまとまった研究は一層必要になると思われる。

〔文献〕

Journals

Beiträge zur Japanologie. Wien: Institut für Japanologie, Universität Wien. Appears irregularly.

Berliner Beiträge zur sozial-und wirtschaftswissenschaftlichen Japanforschung. Bochum: Brockmeyer. Appears irregularly.

Bochumer Jahrbuch zur Ostasienforschung. Bochum: Fakultät für Ostasienwissenschaften der Ruhr-Universität Bochum. Appears annually.

Bonner Zeitschrift für Japanologie. Bonn: Japanologisches Seminar der Universität Bonn. Appears irregularly.

Japanforschung. Mitteilungen der Gesellschaft für Japanforschung. Trier. Appears semiannually.

Japanstudien. Jahrbuch des Deutschen Instituts für Japanstudien der Philipp-Franz-von-Siebold-Stiftung. München. Appears annually.

Japonica Neerlandica. Monographs of the Netherlands Association for Japanese Studies. Leiden. Appears irregularly.

Marburger Japan-Reihe. Marburg: Förderverein Marburger Japan-Reihe. Appears irregularly.

Mitteilungen der Gesellschaft für Natur-und Völkerkunde Ostasiens (MOAG). Hamburg. Appears irregularly.

Nachrichten der Gesellschaft für Natur-und Völkerkunde Ostasiens. Zeitschrift für Kultur und Geschichte Ost- und Südostasiens (NOAG). Hamburg. Appears irregularly.

Newsletter. Vereinigung für sozialwissenschaftliche Japanforschung. Wien. Appears irregularly.

Oriens Extremus. Zeitschrift für Sprache, Kunst und Kultur der Länder des Fernen Ostens. Wiesbaden. Appears semiannually.

Rundbrief (e). Deutsch-Japanische Gesellschaft für Sozialwissenschaften. Saarbrücken. Appears irregularly.

Books and articles

Adami, Norbert Richard (1981): *Verzeichnis der europäischsprachigen Literatur über die Ainu*. Wiesbaden: Har-

- rassowitz (Veröffentlichungen des Ostasien-Instituts der Ruhr-Universität Bochum; 27).
- Adami, Norbert Richard (1991): *Ainu minzoku bunken mokuroku. Ôbun-hen. Bibliography of materials on the Ainu in European languages*. Translated by Yôsuke Kosaka. Sapporo: Sapporo-dô.
- Antoni, Klaus (1991): *Der Himmlische Herrscher und sein Staat. Essays zur Stellung des Tennô im modernen Japan*. München: Iudicium.
- Aspects of value change in Germany and Japan. (Proceedings of a symposium, held at the Deutsches Institut für Japanstudien, Tôkyô, April 16-19, 1991.) In: *Japanstudien*. Jahrbuch des Deutschen Instituts für Japanstudien der Philipp-Franz-von-Siebold-Stiftung (München) 4, 1992 (1993): 13-218.
- Baerlocher, Nicolas, and Martin Bircher (ed.) (1993): *Japan: Selbstbild-Fremdbild*. Zürich: Strauhof Zürich (Reihe Strauhof Zürich; 7).
- Befu, Harumi, and Josef Kreiner (eds.) (1992): *Othernesses of Japan. Historical and cultural influences on Japanese studies in ten countries*. München: Iudicium (Monographien aus dem Deutschen Institut für Japanstudien der Philipp-Franz-von-Siebold-Stiftung; 1).
- Bremen, Jan van (1990): Japanese Studies in the Netherlands, 1985-1990. In: *Bulletin of the European Association of Japanese Studies* 33: 12-17.
- Croissant, Doris et al. (eds.) (1993): *Japan und Europa, 1543-1929*. Eine Ausstellung der "43. Berliner Festwochen" im Martin-Gropius-Bau Berlin. Berlin.
- Demes, Helmut et al. (1994): *Die japanische Wirtschaft heute-ein Überblick*. Tokyo: Deutsches Institut für Japanstudien der Philipp-Franz-von-Siebold-Stiftung (Miscellanea; 10).
- Demes, Helmut, and Walter Georg (eds.) (1994): *Gelernte Karriere. Bildung und Berufsverlauf in japan..* München: Iudicium (Monographien aus dem Deutschen Institut für Japanstudien der Philipp-Franz-von-Siebold-Stiftung; 9).
- Dettmer, Hans Adalbert (1989): *Ainu-Grammatik. Teil I: Texte und Hinweise*. 2 vols. Wiesbaden: Harrassowitz (Veröffentlichungen des Ostasien-Instituts der Ruhr-Universität Bochum; 38).
- Erlen, Kornelia (1993): *Konzeptionen der japanischen Agrarsoziologie*. Die dôzoku-Forschung. Bonn: Holos (Bonner Zeitschrift für Japanologie; 12).
- Flüchter, Winfried (ed.) (1994): Japan and Central Europe restructuring. (Proceedings of the 7th Japanese-German Geographical Conference in Heidelberg and Duisburg 1992.) Wiesbaden: Harrassowitz.
- Formanek, Susanne, and Peter Getreuer (1989): *Verzeichnis des deutschsprachigen Japan-Schrifttums, 1980-1987*. Wien: Österreichische Akademie der Wissenschaften.
- Getreuer, Peter (1991): *Verzeichnis des deutschsprachigen Japan-Schrifttums, 1988-1989. Nebst Ergänzungen zu den Jahren 1980-1987*. Wien: Österreichische Akademie der Wissenschaften.
- Hadamitzky, Wolfgang, and Marianne Kocks (1990/1993): *Bibliography of Japan. German-language publications on Japan*. Series A: Monographs, periodicals, maps. Volume 1: 1477-1920; volume 2: 1921-1950. München: Saur.
- Hax, Herbert et al. (eds.) (1990): *Pacific cooperation from the Japanese and the German viewpoint*. 9th German-Japanese seminar on economics and sciences held at Tokyo, September 24-27, 1987. Berlin: Springer.
- Hemmert, Martin (1993): *Vertikale Kooperation zwischen japanischen Industrie-unternehmen*. Wiesbaden: Deutscher Universitäts-Verlag.
- Herbert, Wolfgang (1992): Die Tagelöhner-Unruhen im Oktober 1990 in Ôsaka und deren struktureller Hintergrund. In: *Japanstudien*. Jahrbuch des Deutschen Instituts für Japanstudien der Philipp-Franz-von-Siebold-Stiftung (München) 3, 1991: 221-253.
- Herbert, Wolfgang (1993): *Die asiatische Gefahr. Ausländerkriminalität in Japan als Argument in der Diskussion um ausländische "illegale" Arbeits-migrantInnen*. Wien: Institut für Japanologie, Universität Wien (Beit-

- räge zur Japanologie; 30).
- Hijiy-Kirschner, Irmela (1988): *Das Ende der Exotik. Zur japanischen Kultur und Gesellschaft der Gegenwart*. Frankfurt/M.: Suhrkamp (edition suhrkamp; 1466).
- Kalland, Arne (1981): *Shingū: A study of a Japanese fishing community*. London: Curzon Press.
- Kalland, Arne (1986): *Japan bak fasaden*. Oslo: J. W. Cappelen.
- Kalland, Arne (in print): *Fishing villages in Tokugawa Japan*. London: Curzon Press; Honolulu: University of Hawaii Press.
- Kalland, Arne, and Brian Moeran (1992): *Japanese whaling: end of an era*. London: Curzon Press.
- Kapitz, Peter (ed.) (1990): *Japan in Europa. Texte und Bilddokumente zur euro-päischen Japankenntnis von Marco Polo bis Wilhelm von Humboldt*. München: Iudicium. 2 vols.
- Kevenhörster, Paul (1993): *Politik und Gesellschaft in Japan*. Mannheim: B. I.-Taschenbuchverlag (Meyers Forum; 16).
- König, Eva, und Hans Dieter Ölschleger (1994): Haushalt und Familie in San Juan de Yapacani, einer japanischen Auswanderer-Kolonie in Bolivien. In: *Japan-studien*. Jahrbuch des Deutschen Instituts für Japanstudien der Philipp-Franz-von-Siebold-Stiftung (München) 5, 1993: 311-339.
- König, Eva, und Hans Dieter Ölschleger (1995): *Japanische Auswanderer in der Neuen Welt. I: Nordamerika. II: Lateinamerika. Eine teilweise annotierte Bi-bliographie europäi schsprachiger Publikationen*. München: Iudicium. 2 vols.
- Kornadt, Hans-Joachim, and Gisela Trommsdorff (eds.) (1993): *Deutsch-japanische Begegnungen in den Sozial-wissenschaften. Wiederbeginn wissenschaftlicher Kooperation in gesellschaftsbezogener Forschung*. Konstanz: Universitäts-verlag Konstanz (Konstanzer Beiträge zur sozialwissenschaftlichen Forschung; 6).
- Kracht, Klaus (1990): *Japanologie an deutschsprachigen Universitäten*. Wiesbaden: Harrassowitz.
- Kreiner, Josef (1990): Das Bild Japans in der europäischen Geistesgeschichte. In: *Japanstudien*. Jahrbuch des Deutschen Instituts für Japanstudien der Philipp-Franz-von-Siebold-Stiftung (München) 1, 1989: 13-42.
- Kreiner, Josef (in print): Sources of Ryūkyūan history and culture in European collections. München: Iudicium (Monographien aus dem Deutschen Institut für Japanstudien der Philipp-Franz-von-Siebold-Stiftung; 13).
- Kreiner, Josef (ed.) (1993): *European studies on Ainu language and culture*. München: Iudicium (Monographien aus dem Deutschen Institut für Japanstudien der Philipp-Franz-von-Siebold-Stiftung; 6).
- Kreiner, Josef, and Hans Dieter Ölschleger (1987): *Ainu. Jäger, Fischer und Sammler in Japans Norden..* Köln: Rautenstrauch-Joest-Museum.
- Kreiner, Josef, and Hans Dieter Ölschleger (1989a): *Les Aïnous. Peuple chasseur, pêcheur et cueilleur du Nord du Japon*. Bruxelles: Crédit Communal.
- Kreiner, Josef, and Hans Dieter Ölschleger (1989b): *De Ainoe. Jagers, vissers en plukkers uit Noord-Japan*. Bruxelles: Gemeentekrediet.
- Linhart, Sepp (1993): *Japanologie heute. Zustände-Umstände*. Wien: Institut für Japanologie, Universität Wien (Beiträge zur Japanologie; 31).
- Linhart, Sepp, and Fleur Wöss (1984): *Old age in Japan. An annotated bibliography of Western-language materials*. Wien: Institut für Japanologie, Universität Wien (Beiträge zur Japanologie; 20).
- Lützel, Ralph (1994): *Räumliche Unterschiede der Sterblichkeit in Japan. Sterb-lichkeit als Indikator regionaler Lebensbedingungen*. Bonn: Dümmler (Bonner geographische Abhandlungen; 89).
- Maderdonner, Megumi (1987): *Old age in Japan. An annotated bibliography of Japanese books*. Wien: Institut für Japanologie, Universität Wien (Beiträge zur Japanologie; 25).
- Maull, Hanns, and Volker Fuhr (1993): *Japan und Europa: Getrennte Welten?* Frankfurt/M.: Campus.
- Nakamura, Keisuke, Helmut Demes, and Hitoshi Nagano (1994): *Work organiza-tion in Japan and Germany*.

- A research report on VCR production (1). Sagyô soshiki no Nichi-Doku hikaku. VTR seisan shokuba no jirei* (1). Tôkyô: Deutsches Institut für Japanstudien der Philipp-Franz-von-Siebold-Stiftung (Miscellanea; 6).
- Ölschleger, Hans Dieter (1989): *Umwelt und Wirtschaft der Ainu. Bemerkungen zur Ökologie einer Wildbeutergesellschaft*. Berlin: Reimer.
- Ölschleger, Hans Dieter, and Jürgen Stalph (1990): *Japanbezogene Bibliographien in europäischen Sprachen. Eine Bibliographie*. München: Iudicium (Bibliographische Arbeiten aus dem Deutschen Institut für Japanstudien der Philipp-Franz-von-Siebold-Stiftung; 1).
- Ölschleger, Hans Dieter et al. (1994): *Individualität und Egalität im gegenwärtigen Japan. Untersuchungen zu Wertemustern in bezug auf Familie und Arbeitswelt*. München: Iudicium (Monographien aus dem Deutschen Institut für Japanstudien der Philipp-Franz-von-Siebold-Stiftung; 7).
- Pascha, Werner (1994): *Die japanische Wirtschaft*. Mannheim: B. I.-Taschenbuch-verlag (Meyers Forum; 24).
- Pohl, Manfred (ed.) (1992): *Japan 1991/1992. Politik und Wirtschaft*. Hamburg: Institut für Asienkunde. (Appears annually.)
- Radtke, Kurt (1990): *China's relations with Japan, 1945-83: the role of Liao Chengzhi*. Manchester: Manchester University Press.
- Refsing, Kirsten (1986): *The Ainu language. The morphology and syntax of the Shizunai dialect*. Aarhus: Aarhus University Press.
- Rothacher, Albrecht (ed.) (1992): *Landwirtschaft und Ökologie in Japan*. München: Iudicium.
- Sjöberg, Katarina (1993): *The return of the Ainu. Cultural mobilization and the practice of ethnicity in Japan*. Philadelphia, Penn.: Harwood Academic Publishers.
- Slawik, Alexander (1992): *Die Eigentumsmarken der Ainu*. Berlin: Reimer.
- Steenstrup, Carl (1980): *Japans Idéhistorie*. Copenhagen: Berlingske forlag.
- Steenstrup, Carl (1982): *Shinto*. Copenhagen: Gyldendal.
- Tokunaga, Shigeyoshi, Norbert Altmann, and Helmut Demes (eds.) (1992): *New impacts on industrial relations. Internationalization and changing production strategies*. München: Iudicium (Monographien aus dem Deutschen Institut für Japanstudien der Philipp-Franz-von-Siebold-Stiftung; 3).
- 東京国立博物館編：特別展観「アイヌの工芸」図録 東京国立博物館 1993年
- ドイツ-日本研究所編：「世界に誇る・琉球王朝文化遺宝展—ヨーロッパ・アメリカ秘蔵—」図録 ドイツ-日本研究所 1992年
- Vereinigung für sozialwissenschaftliche Japanforschung (ed.) (1992): *Wissenschaftliche Jahrestagung "Individualisierung in der japanischen Gesellschaft", 4.-6. 12. 1992*. Berlin: Japanisch-Deutsches Zentrum Berlin (Veröffentlichungen des Japanisch-Deutschen Zentrums Berlin; 14).
- Waldenberger, Franz (ed.) (1994): *The political economy of trade conflicts. Past adjustments and new challenges in the management of trade relations in the US-EU-Japan triad*. Berlin: Springer.